

知覚動詞構文と使役動詞構文の不定形句の扱いについて

論文

甲斐崎 由典

ドイツ文法理論研究会（編）

『エネルギー』第24号

25～46頁

1999年5月20日発行

（この抜き刷りの頁割りは実際に出版されたものと異なります）

知覚動詞構文と使役動詞構文の不定形句の扱いについて

甲斐崎 由典

1. はじめに^{*}

拙論で筆者は、制御構文・繰り上げ構文などの様々な不定形構文を、主辞駆動句構造文法¹によって分析するために、不定形句に適用される語彙規則を新たに提案した（拙論[1998]）。この語彙規則は、不定形になった動詞が音形を持つ主語を要求しないように、動詞に語彙記述されている SUBCAT 素性から主語項を削除するものである。そして実際にこの語彙規則を用いていくつかの制御構文や繰り上げ構文の構文解析を行ったところ、繰り上げ構文とはこの語彙規則はうまく噛み合わないことが明らかになった（拙論[1999]）。

本論文では、今度はこの語彙規則を用いた構文解析を動作主対格構文²に対して行い、この語彙規則による不定形句構文の構文解析の意義を再検討してみたい。

2. 制御構文と繰り上げ構文の構文解析

2.1. 制御構文と繰り上げ構文

拙論[1998]と一部重複するが、いわゆる制御構文・繰り上げ構文とは（筆者の場合）どのような構文か、ごく簡単にまとめてみよう。

制御³ 構文

* 本論文は、1998 年度早稲田大学特定課題研究助成費（研究課題「主辞駆動句構造文法 (HPSG) による現代ゲルマン語の構文解析の実際」、課題番号 98A-094）による研究成果の一部をまとめたものである。

1 （独）kopfgesteuerte Phrasenstrukturgrammatik、（英）head-driven phrase structure grammar。以降「主辞駆動文法」と略す。

2 どうさしゅ・たいかく・こうぶん。いわゆる「不定形付き対格構文（＝ accusativus cum infinitivo）」。AcI と略記することが多い。

3 （独）Kontrolle、（英）control。

(1) Schwester Monika, die lustigste, versprach ihm, den Brief von der Nachtwache mitzunehmen, dann komme er heute noch an. (Muschg: 344)

(1') # Schwester Monika versprach ihm, den Brief mitzunehmen.⁴

(2) Er schrieb ihr nichts davon, hatte trotzdem immer Angst vor einem Besuch, oder noch schlimmer, einem Brief an die falsche Adresse; also schrieb er, sobald ihm die Wunde erlaubte etwas aufzusitzen, selbst einen Brief. (Muschg: 343)

(2') # Die Wunde erlaubte ihm, aufzusitzen.

では、不定形句の意味上の主語（斜体で表記）は、定形動詞の項としての意味役割と、不定形動詞の項としての意味役割と、ふたつの異なる意味役割を担うことがわかる。(1)ではモニカ看護婦は定形動詞の項としては「約束する」存在、不定形動詞の項としては「持って行く」存在であり、(2)では「彼」は定形動詞の項としては「許してもらふ」存在、不定形動詞の項としては「起きあがる」存在である。

一方、繰り上げ⁵ 構文

(3) Das Leben schien sie bescheiden gemacht zu haben, zur Teilnahme fähig. (Muschg: 334)

(3') # Das Leben schien, sie bescheiden gemacht zu haben.

(3'') # Das Leben hatte sie bescheiden gemacht.

では、不定形句の意味上の主語に、(3')のように無理矢理分割して、定形動詞の項としてと不定形動詞の項としてとふたつの異なる意味役割を求めようとする、不定形動詞の項としては意味役割が考えられるが、定形動詞の項としては意味役割が考えようがないことがわかる。それよりは、この構文は(3'')が全体として scheinen という動詞と分かち難く合成され、できた文の主語の位置には元の文の主語が「繰り上がり」、元の文で定形だった動詞は不定形に変換されるところの方が良さそうである。このことは、次のような例があることから裏付けられよう。

(4) Ihm scheint geholfen zu werden. ([Ebert 1975: 178])

(4') # Ihm wird geholfen.

4 本論文では、容認性は問わず、議論を進める便宜上再構成して作った文に「#」を付す。

5 (独) Anhebung (Hebung)、(英) raising。

2.2. 不定形句化語彙規則

再び繰り返しになるが、拙論[1998, 1999]で提案した不定形句化語彙規則と、それを用いた制御構文の構文解析をごく簡単に見てみよう⁶。

まず語彙規則は動詞が zu-不定形句になると、

(5) zu-不定形句化語彙規則

$$\left[\begin{array}{c|c} \text{CAT} & \text{HEAD} \left[\begin{array}{cc} \text{VFORM} & \text{inf} \\ \text{SUBJ} & < \text{NP} > \end{array} \right] \end{array} \right] \longrightarrow \left[\begin{array}{c|c} \text{CAT} & \text{HEAD} \left[\begin{array}{cc} \text{NFORM} & \text{zu-inf} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

のように、本来必要な主語項を、統語的には要求しないようにするものである。変換はここに挙げた部分だけであり、意味に関わる CONTENT 素性に含まれる主語項は削除しない。

(1')で構文解析してみよう。この語彙規則により、動詞

(6) mitnehmen

$$\left[\begin{array}{c|c} \text{CAT} & \left[\begin{array}{c|c} \text{HEAD} & \left[\begin{array}{cc} \text{VFORM} & \text{inf} \\ \text{SUBJ} & < \text{NP}[\text{nom}] \boxed{1} > \end{array} \right] \\ \text{SUBCAT} & < \text{NP}[\text{acc}] \boxed{2} > \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \text{CONTENT} & \left[\begin{array}{cc} \text{RELATION} & \text{mitnehmen} \\ \text{ARG1} & \boxed{1} \\ \text{ARG2} & \boxed{2} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

は次のように変換され、

6 このような語彙規則の提案と、それを用いた制御構文の構文解析の理論的根拠付けや評価、さらに他の立場をとる研究などについてはここでは繰り返さない。拙論[1998, 1999]を参照。

(7) den Brief mitzunehmen

$$\left[\begin{array}{l} \text{CAT} \left[\begin{array}{l} \text{HEAD} \left[\begin{array}{l} \text{NFORM} \quad \textit{zu-inf} \end{array} \right] \\ \text{SUBCAT} \quad < > \end{array} \right] \\ \\ \text{CONTENT} \left[\begin{array}{l} \text{RELATION} \quad \textit{mitnehmen} \\ \text{ARG1} \quad \boxed{?} \\ \text{ARG2} \quad \boxed{2} \end{array} \right] \end{array} \right] \quad (\text{den Brief})$$

これと、zu-不定形句を含む場合に次のように語彙記述される動詞

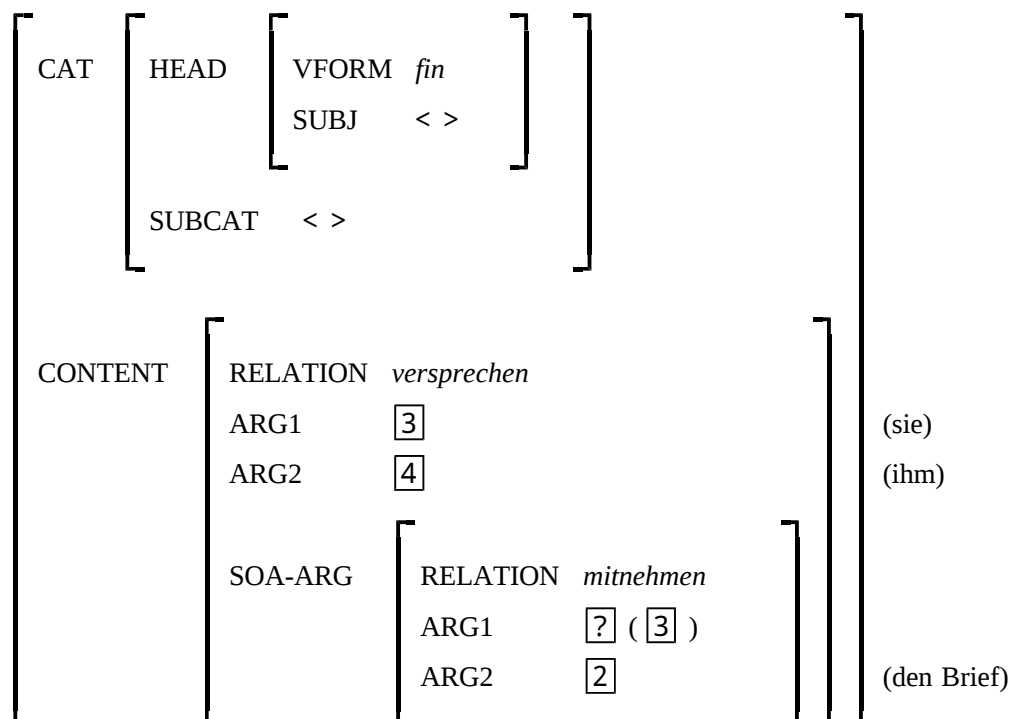
(8) versprechen

$$\left[\begin{array}{l} \text{CAT} \left[\begin{array}{l} \text{HEAD} \left[\begin{array}{l} \text{VFORM} \quad \textit{inf} \\ \text{SUBJ} \quad < \text{NP}[\textit{nom}] \boxed{3}> \end{array} \right] \\ \text{SUBCAT} \quad < \text{NP}[\textit{dat}] \boxed{4}, \text{NP}[\textit{zu-inf}]:\boxed{5}> \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{CONTENT} \left[\begin{array}{l} \text{RELATION} \quad \textit{versprechen} \\ \text{ARG1} \quad \boxed{3} \\ \text{ARG2} \quad \boxed{4} \\ \text{SOA-ARG} \quad \boxed{5} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

とが単一化して、文全体では次のようになると考えられる。

(9) # Sie versprach ihm, den Brief mitzunehmen.



ここで、CONTENT 素性の状況項 (SOA-ARG) の第 1 項を見ると、zu-不定形句化語彙規則で統語的には削除されてしまった項も、意味的には同定する余地があることがわかる⁷。

2.3. 繰り上げ構文の構文解析

既に述べたように、zu-不定形句化語彙規則を用いて繰り上げ構文の構文解析を試みても上手くいかない。拙論[1999]では、その結果を受けて、繰り上げ構文の構文解析は従来通り行う方がよいのでは、ということ述べたが、その従来通りの繰り上げ構文の構文解析自体は具体的に示さなかった。しかしながら、本論文でも再び制御構文と繰り上げ構文の本質的な違いが問題となってくるので、ここで従来から行われている繰り上げ構文の構文解析⁸を具体的に示しておきたい。

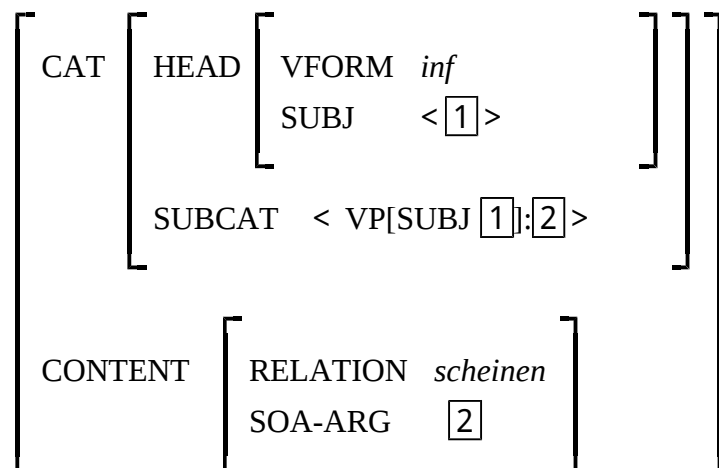
まず、繰り上げ動詞の語彙記述を示す。ここで注目すべきは、繰り上げ動詞の主語と、その動詞の下位範疇化項である不定形句 (VP) が要求する主語は構

7 ただし、同定するための何らかの統語的手続きの存在を考えているわけではない。一般に、制御構文での不定形動詞の意味上の主語同定は、機械的な統語的手続きだけでは難しいことがわかっている。拙論[1999]の 00 頁などを参照。

8 [Kiss 1995, 1994]、[Borsley/Suchsland 1997]などを参照。

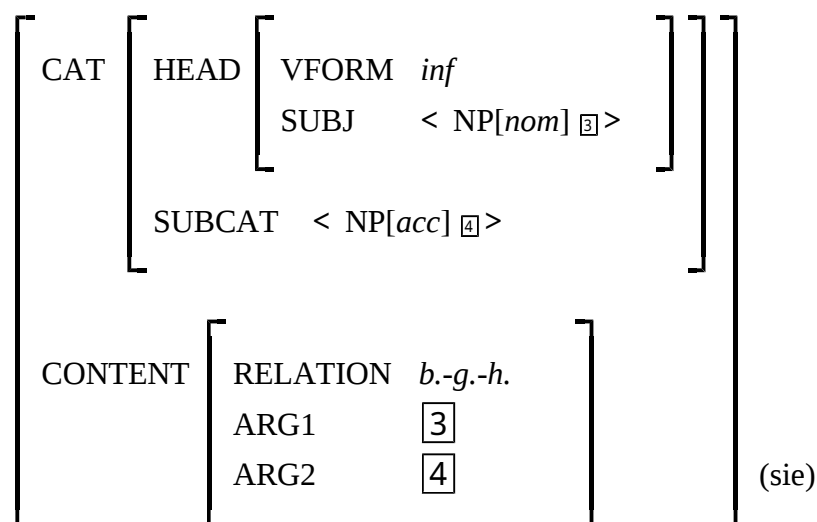
造を共有している (structure sharing)、つまり経路は違うが同じ個体であり (token-identical)、単に同じ指標 (INDEX) が付けられている場合と異なる、ということである⁹。

(10) scheinen



ここでは (3') を構文解析するが、簡略のため不定形句の動詞は *bescheiden-gemacht-haben* (b.-g.-h.) とまとめて考える。すると、zu-不定形句化語彙規則を適用していない不定形句は次のようになり、

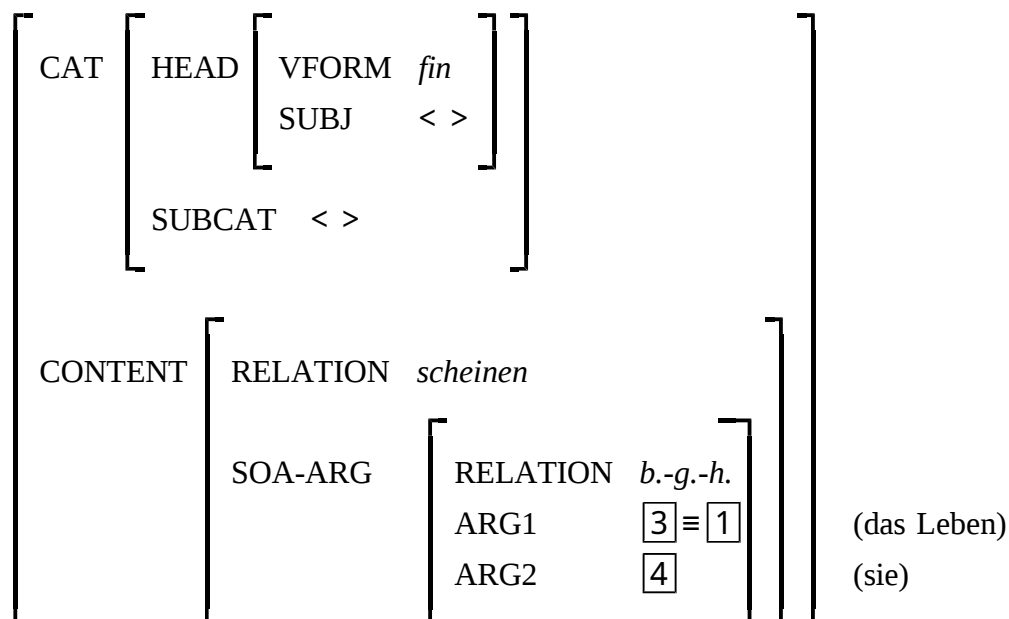
(11) sie bescheiden gemacht zu haben



文全体としては次のようになる。

9 筆者のように zu-不定形句化語彙規則を用いて制御構文を分析する際にはあまり問題とならないが、「標準」理論ではこの点は特に重要な意味を持つ。[Pollard/Sag 1994: 136]や[Kiss 1995: 83-85]などを参照。

(12) # Das Leben schien sie bescheiden gemacht zu haben.



3. 動作主対格構文の構文解析

本論文で取り上げる知覚動詞構文と使役動詞構文は、繰り上げ構文と同じように、親文¹⁰ 動詞として使える動詞が非常に少ない不定形句構文である。また、どちらも筆者が付けた名称からもわかる通り、不定形動詞の意味上の主語、あるいはもっとはっきり言って動作主は、必ず対格で現れる。他にも、完了時制にしたときに、定形動詞は過去分詞ではなく代用不定形になるという特徴もある。このふたつの構文はいずれも古くからゲルマン語諸語に存在しており、またラテン語にも同じ形式の構文がある（そもそも「不定形付き対格構文」という名称はラテン語文法からのものである）ことから、やはり古くから独立した構文としてはっきりと意識されてきた。

しかしながら、これらの構文を構文解析という観点から見つめ直した研究はあまり多くなく、特にまだ新しい主辞駆動文法という理論的枠組みにおいては

10 本論文では、不定形句構文において、統語的に直接、すなわち構文木で考えた場合に最初にこの不定形句を包括する文を「親文」と呼ぶことにする。（独）Matrixverb の訳語として筆者が考えたものである。

そうである¹¹。今回、筆者は拙論[1998, 1999]で検討した制御構文と繰り上げ構文の構文解析の成果を、このふたつの動作主対格構文に適用した結果、多少なりとも得るところがあったと考えているので、ここにそれについて述べることにしたい。

3.1. 不定形句の zu の有無

動作主対格構文が制御構文や繰り上げ構文ほどの注目を浴びなかった理由としては、zu-不定形、つまりはっきりとした不定形の目印である zu がついていない不定形の構文である、ということも考えられよう。主辞駆動文法ではそうでもないが、制御構文や繰り上げ構文に関して膨大な研究のある生成文法では、主辞駆動文法のような語彙規則は認めないので、zu という音形を持つ文肢に、ある種の変換機能を持たせることが非常に重要となってくる。その場合、動作主対格構文のような「裸」の不定形の存在は面倒なことになる。

確かに、あってもなくてもよいということはなく、構文によってはっきり必要かそうでないか決まっている文肢というのは、「構文」解析上重要な存在であると筆者も考える。しかしながら、拙論[1999]に引き続き本論文でもまた、zu という文肢に固有な働きは認めず、動詞が「不定形である」ことの方に注目し、筆者が行ってきた制御構文と繰り上げ構文の構文解析の手法をそのまま動作主対格構文にも拡張することにしたい。この「そのまま」ということは、後で実際に行うように、zu-不定形句化語彙規則や繰り上げ動詞の語彙記述を、zu を含んでいない構文にも同じように適用してしまう、ということである。

このような一見「目的のためには手段を選ばない」ような強引なやり方にも、まったく根拠がないわけではない。動作主対格構文が古くからゲルマン語諸語に存在していることは既に述べたが、話法助動詞構文も含めて、様々な不定形構文での zu (あるいはそれに相当するもの) の有無は案外ばらばらである。例えば、ドイツ語では dürfen と一緒に使う不定形には zu は付けないが、アイスランド語では þurfa と一緒に使う不定形には að を付け、オランダ語では durven と一緒に使う不定形には te を付けても付けなくてもよい。しかし、いずれの場合も一緒に使われる動詞は、音形のある主語を要求したり、不定形以外の活用形になってはならないという点は共通している。このような観察事実からも、同

11 動作主対格構文について、現象記述だけではなく構文解析まで踏み込んで論じたものとしては、[Suchsland 1987a]、[Suchsland 1987b]、[Eisenberg 1994: 385-390]などがあるに過ぎない。主辞駆動文法による構文解析、と限定してしまうと、本論文と同じく、作業仮説の提案に止まっている[Heinz/Matiasek 1994: 231-232]と[Kiss 1995: 11-14, 213-218]位であろう ([Pollard 1994]も受動化との関連でわずかに触れてはいる)。

語反復ながら、不定形構文では zu のような不定形標識があることよりも、動詞が不定形である、ということの方が本質的なことである、と考えたい¹²。

3.2. 知覚動詞構文

親文を構成する動詞としては sehen, hören, fühlen, spüren などがある。

(13) Ich sehe ihn arbeiten.

従来までの研究の多くは、この構文では、不定形動詞の意味上の主語である対格は不定形動詞の項としての意味役割をひとつ担うだけで、親文の動詞からは直接意味役割を与えられていないと考えている¹³ が、筆者もこの考え方を採って、この構文を繰り上げ構文に似た構文として分析してみたい。すなわち、後出の知覚動詞の語彙記述にも盛り込むが、この構文では主格主語という個体(individual)が知覚するのは、個体と関係(relation)という別々のものではなく、個体と関係によって構成されるひとつの状況(situation)である、と考えてみる。

その前にここでひとつ強力な反論として、[Eisenberg 1994: 387-388]を取り上げよう。それによれば、sehen のような知覚動詞には、

(14) Ich sehe ihn.

のような場合は結合価は 2 で、知覚動詞構文の場合は結合価は 3 とするべきであり、対格項と不定形を結びつけることはおかしいという。これはいろいろと文肢を文頭に移動してみればわかり、

(15a) Zigarren rauchen sieht Helga ihn.

(15b) Ihn sieht Helga Zigarren rauchen.

(15c) *Ihn Zigarren rauchen sieht Helga.

12 これは古い時代については言えない。現代語で、特に制御構文と呼ばれる構文がある背景には、様々な定形動詞と、前置詞 *zi* (古高ドイツ語) や *ze* (中高ドイツ語) を仲介として、動詞の不定形から作られた動名詞の与格形が共存できるようになった、という経緯があるからである。この場合 *zi* や *ze* には現代語での不定形標識 *zu* 以上の本質的な機能があることは言うまでもない。

13 これには、英語では可能な目的語繰り上げ構文

(i) They believe him to be happy. ([Pollard/Sag 1994: 134])

(ii) * Sie glauben ihm/ihn glücklich zu sein.

との類似性も影響していると思われるが、本論文では目的語繰り上げ構文は取り上げない。

([Eisenberg 1994: 388]と[Kiss 1995: 11, 217]¹⁴ に一部変更を加えた。)

という結果からわかる通り、対格項と不定形はひとつの構成要素を形成していない、ということである¹⁵。

確かに(15)からは、対格項と不定形を「統語的には」まとめて扱えないことが示されたと言えようが、これがただちに、統語的情報も意味的情報も等しく考慮しながらの構文解析を目指す主辞駆動文法での語彙記述を制限するとは筆者は考えない。実際、統語的には対格項と不定形に結びつきがないことが示されたわけであるが、ではこの構文の意味的情報を考えると、やはり不定形動詞の意味上の主語は必ず対格項であり、この関係は不可分のものなのである。つまり、統語的に分断したところで、意味的に分析を進めると再び強く結びついてしまうのである。

そもそも、このような不定形動詞と意味上の主語の意味的な結びつきは繰り上げ構文で明白である。繰り上げ構文でも様々な文肢が個別に文頭へ移動できるが、ここで意味的に考えた場合、不定形動詞とそれらの文肢の結びつきが非常に強いことには何ら反論の余地はないであろう。

さて、知覚動詞の語彙記述であるが、一見すると親文動詞の項のように見える項（ただし繰り上げ構文と違って知覚動詞構文ではいつでも対格）が不定形句に「繰り下がる」点は繰り上げ構文と同じであるが、不定形句が構成する状況項を知覚する個体が項として明示的に含まれる点が当然異なる。

14 [Kiss 1995]も[Eisenberg 1994]の例を取り上げているが、それは筆者が今問題としている議論とは直接関係なく、動作主対格構文を 3 価動詞と考える意見の紹介と（11 頁）、動作主対格構文の不定形句には結束性があることの根拠のひとつとして挙げている（217 頁）。

15 ただし、[Eisenberg 1994]の議論は主辞駆動文法を念頭に置いたものではなく、あくまで「結合価」を意識したものである。

(16) sehen

CAT	HEAD	VFORM	<i>inf</i>
		SUBJ	< NP[<i>nom</i>] 2 >
		SUBCAT < VP[SUBJ 1 : 3] >	

CONTENT	RELATION	<i>sehen</i>
	ARG1	2
	SOA-ARG	3

(13)で構文解析すると、不定形動詞 *arbeiten* は次のようになり、

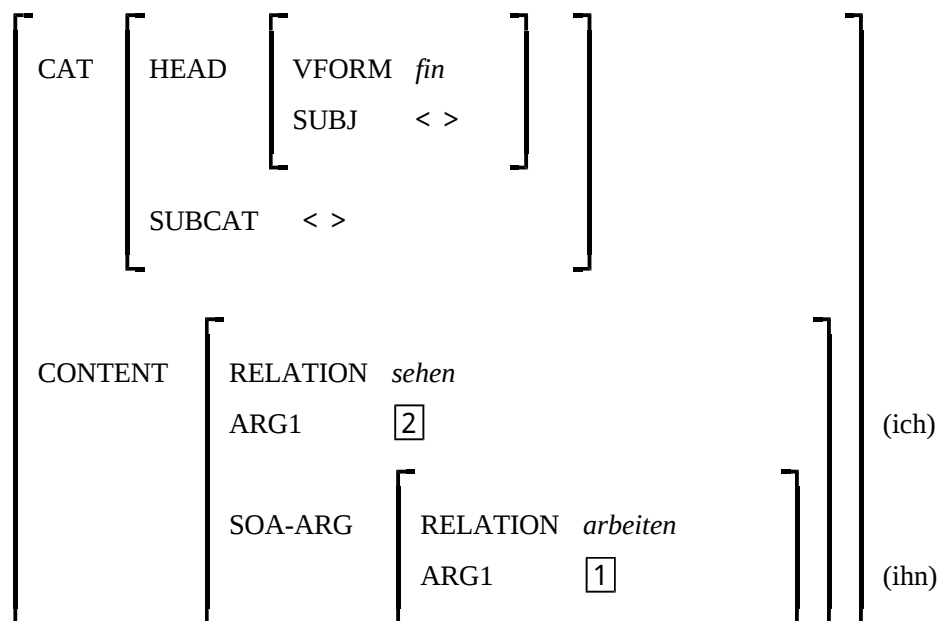
(17) *arbeiten*

CAT	HEAD	VFORM	<i>inf</i>
		SUBJ	< NP[<i>nom</i>] 1 >

CONTENT	RELATION	<i>arbeiten</i>
	ARG1	1

文全体では次のようになろう。

(18) Ich sehe ihn arbeiten.



依然残る問題点としては、対格項がなぜ対格であるか、つまり繰り上げ構文と違ってなぜ不定形動詞の主語は強制的に対格形にされてしまうか、ということである。

しかしながら筆者は、この知覚動詞構文も含めて、一連の不定形構文での文肢の格の現れ方について、まだ統一的な見解を見出せないでいるので、ここでは問題はそのままにしておかざるを得ない。ただ現時点で言えることは、拙論[1999]でも触れた不定形句の結束性とも関連するだろうが、このような格の現れ方を考える上では、意味的なことよりも、親文動詞が文全体に及ぼす統語的・構造的な「支配力」に注目すると良いのではないか、ということである¹⁶。

3.3. 使役動詞構文

親文動詞としてこの構文を構成するものは *lassen*, *machen*, *heißen* などがある。

(19) Ich lasse ihn arbeiten.

lassen による使役動詞構文¹⁷にはふた通りの解釈が可能である。(19)で言えば、「彼に働いてもらう」というのと「彼を働かせておく」というふたつの解

16 [Heinz/Matiasek 1994]も参照。

17 より正確には、「静態(statisch)ではなく動態を表す(nichtstatisch)不定形動詞と *lassen* による使役動詞構文」である。[Eisenberg 1994: 389]を参照。

釈があり得る。[Eisenberg 1994: 389]では前者の解釈を「指令的(direktiv)¹⁸」読み、後者の解釈を「許可的(permissiv)」読みと呼んでいる。このふたつの読みは、微妙な意味合いを別とすれば次のような制御構文で表すことができよう。

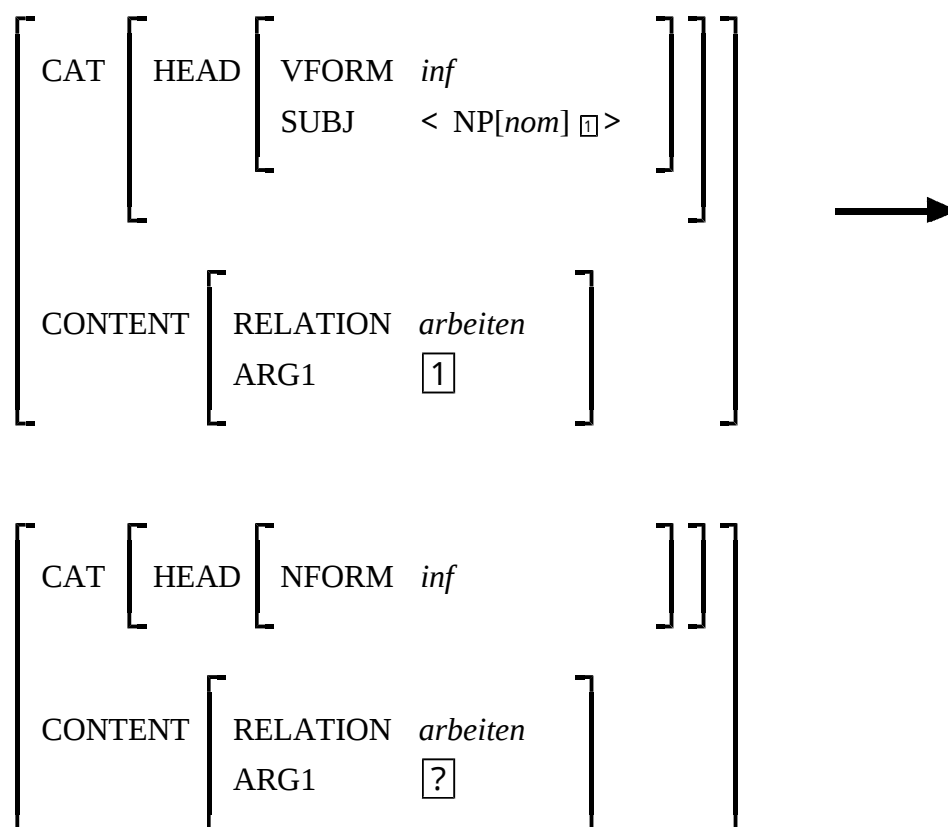
(20) Ich veranlasse ihn zu arbeiten. (指令的読み、[Eisenberg 1994: 389]による言い換え)

(21) Ich erlaube ihm zu arbeiten. (許可的読み)

そうなると、不定形動詞の意味上の主語である対格項は、制御構文と同じくふたつの意味役割を担っていると考えられるので、ここでは使役動詞構文を制御構文と同じように構文解析してみることにする。

制御構文に準じて、不定形動詞は親文に組み込まれるときに(zu-)不定形句化語彙規則により次のように変換されるとする。

(22) arbeiten



一方、「制御」動詞 lassen は(8)と同じく次のように語彙記述できよう。

18 [Kiss 1995: 12]では「使役的(kausativ)」読みとなっている。

(23) lassen

CAT	HEAD	VFORM <i>inf</i>
	SUBJ	< NP[nom] 2 >
SUBCAT < NP[acc] 3, NP[inf]:4 >		
CONTENT	RELATION	<i>lassen</i>
	ARG1	2
	ARG2	3
	SOA-ARG	4

この両者が単一化すると、文全体としては次のようになる。

(24) Ich lasse ihn arbeiten.

CAT	HEAD	VFORM <i>fin</i>
	SUBJ	< >
SUBCAT < >		
CONTENT	RELATION	<i>lassen</i>
	ARG1	2
	ARG2	3
	SOA-ARG	RELATION <i>arbeiten</i>
		ARG1 ? (3)

(ich)

(ihn)

ここで、この使役動詞構文は動作主「対格」構文の一種ということで、状況項内の第 1 項、つまり不定形動詞の動作主は、必ず親文の CONTENT 素性値の第 2 項と同じものを参照する。既に述べたように一般の制御構文では、このような機械的に不定形動詞の意味上の主語を同定することはできないが、この使

役動詞構文という制御構文に限り、そのような自動的な同定を指定することができよう。

3.4. 知覚動詞構文と使役動詞構文の違い

さて、以上のように本論文では、外見は同じ構成のふたつの動作主対格構文を取り上げ、知覚動詞構文は繰り上げ構文的に、使役動詞構文は制御構文的に構文解析したわけだが、このような区別は意味のあることなのだろうか。

文として単一化が終了した(18)と(24)の CONTENT 素性の値を見ると、意味役割の割り振りや、個体項と状況項の組み合わせ方が、文の意味的な情報構成とよく合致しているように見える。しかしながら、これは言うまでもなく同語反復である。構文解析を始めるに当たって、そのような意味的情報構成に合わせるように、語彙規則を導入したり、制御構文と繰り上げ構文のためにそれぞれ別の語彙記述を用いたのである。その意味では、ここで行った構文解析は「出力値を睨んで入力値を微調整した」だけのものかも知れない。また一般に、ある構文解析が統語的にも意味的にも（言語運用論的にも）その場限りのものではなく広汎な妥当性を持つかどうかは、少し回り道をして何らかの傍証を見付けだすしかない。

本論文の場合のように、問題となっているのが構文レベルの場合、傍証探索によく使われる方法は完了形化、受動化、非人称化、などであるが、[Eisenberg 1994: 385-390]や[Kiss 1995: 11-14]が示すように、そのような方法では知覚動詞構文と使役動詞構文の違いを見出すことは難しい。理由のひとつとして、どちらの構文もかなり融通の利かない、固定化した構文であり、少し変わった変換をすると直ちに容認できない文になってしまうことが挙げられる¹⁹。

ここでひとつ、知覚動詞構文と使役動詞構文の違いの傍証として考えられるのは、使役動詞構文では不定形動詞の動作主は音形を持たなくても良い、という事実である²⁰。この場合、対格動作主がなくて果たして本論文で扱ったような使役動詞構文と言えるのか、という反論もあるが、例えば

(25) Paul lässt dir helfen. ([Eisenberg 1994: 390])

19 例えば、能動文と受動文を組み込んで意味が変わるかどうかを確かめようとしても、どちらかが非文になってしまうと判断できない ([Kiss 1995: 9, 12])。

(i a) Ulrich schien Horst geschlagen zu haben. =

(i b) Horst schien von Ulrich geschlagen worden zu sein.

(ii a) Er ließ Ulrich Horst schlagen. = ?

(ii b) *Er ließ Horst von Ulrich geschlagen werden.

20 [Eisenberg 1994: 390]参照。

のような場合、この文からだけでは特定することはできないが、意味役割をふたつ担う動作主の存在は絶対不可欠と言え、標準的なものではないが、少なくとも使役動詞構文の一種とは言えよう。

一方、知覚動詞構文では、もともとこの構文には「まさにその場に居合わせて知覚する」という意味合いが含まれ、不定形動詞に関して不特定の動作主は考えにくいこともあり、次の(26)や(27)のような構成は全く容認されない。

(26) * Ich sehe arbeiten.

(27) * Ich sehe gearbeitet werden.

ただし、これはかなりはっきりした知覚動詞構文と使役動詞構文の違いだと思われるが、これが本論文で示した構文解析の妥当性を示す傍証のひとつとなるかはまだ何とも言えず、あくまでこのふたつの構文に質的な違いがあることを示唆するものと考えた方が良さそうである。

結局、現段階でははっきり言えることは、意味的に本質的な違いがあると考えることができる知覚動詞構文と使役動詞構文を、制御構文と繰り上げ構文の関係を応用して、その意味的な違いに相応しく構文解析することができそうである、ということであろうか。

4. まとめ

本論文では、拙論[1998, 1999]で行った制御構文と繰り上げ構文の構文解析を応用し、知覚動詞構文と使役動詞構文を分析した。その際、今までは動作主対格構文としてひとまとめに見られていたこのふたつの構文を、知覚動詞構文は繰り上げ構文に、使役動詞構文は制御構文に準ずるものとして構文解析を行った。しかし、このような異なる扱い方の妥当性は現段階では充分明らかにできたとは言えず、格表示の問題も含めて、一連の構文解析に対して、今後さらに詳しい検討を加えることが必要である。

5. 参考文献

Bech, Gunnar (1955): Studien über das deutsche Verbum infinitum. København.

Borsley, Robert D./Peter Suchsland (Deutsche Bearbeitung) (1997): Syntax-Theorie. Ein zusammengefaßter Zugang (= Konzepte der Sprach- und Literaturwissenschaft 55). Tübingen.

- Ebert, Robert Peter (1975): Subject raising, the clause squish, and German scheinen-constructions. In: Robin E. Grossman/L. James San/Timothy J. Vance (Hrsg.) Papers from the eleventh regional meeting, Chicago linguistic society. Chicago: 177-187.
- Eisenberg, Peter (1994³): Grundriß der deutschen Grammatik. Stuttgart.
- Helbig, Gerhard/Joachim Buscha (1991¹⁴): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Berlin.
- Heinz, Wolfgang/Johannes Matiassek (1994): Argument structure and case assignment in German. In: John Nerbonne et al. (Hrsg.): 199-236.
- Kiss, Tibor (1995): Infinitive Komplementation. Neue Studien zum deutschen Verbum infinitum (= Linguistische Arbeiten 333). Tübingen.
- Kiss, Tibor (1994): Obligatory coherence: The structure of German modal verb constructions. In: John Nerbonne et al. (Hrsg.): 71-107.
- Köpcke, Klaus-Michael/Klaus-Uwe Panther (1991): Kontrolle und Kontrollwechsel im Deutschen. In: Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung 44.2: 143-166.
- Muschg, Adolf (1992): Ein ungetreuer Prokurist. In: Götz Silatan (Hrsg.): Sommerferien. Frankfurt a.M.: 333-344. (一次文献)
- Nerbonne, John/Claus Netter/Carl Pollard (1994): German in head-driven phrase structure grammar (= CSLI lecture notes 46). Stanford.
- Netter, Klaus (1994): Towards a theory of functional heads: German nominal phrases. In: John Nerbonne et al. (Hrsg.): 297-340.
- Pollard, Carl (1994): Toward a unified account of passive in German. In: John Nerbonne et al. (Hrsg.): 273-296.
- Pollard, Carl/Ivan A. Sag (1994): Head-driven phrase structure grammar (= Studies in contemporary linguistics). Chicago.
- Shannon, Thomas F. (1987): Aspects of complementation and control in modern German. The syntax and semantics of permissive verbs (= Göppinger Arbeiten zur Germanistik 424). Göppingen.
- Suchsland, P. (1987a): Zum AcI und zu verwandten Konstruktionen im Deutschen. Deutsch als Fremdsprache 24: 321-329.
- Suchsland, P. (1987b): Zu Syntax und Semantik von lassen. Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung 40: 652-667.
- Wegener, Heide (1989): „Kontrolle“ — Semantisch gesehen. Zur Interpretation von Infinitivkomplementen im Deutschen. In: Deutsche Sprache 17: 206-228.

拙論（1998）「制御構文の不定詞句の扱いについて」、岩井方男（編）『大木健一郎先生追悼論文集』所収、東京、69～81頁。

拙論（1999）「ドイツ語の制御構文・繰り上げ構文の不定詞句の扱いについて」、『早稲田大学教育学部 学術研究（外国語・外国文学編）』第47号所収、00～00頁。

（拙論は <http://www.venus.dti.ne.jp/~kaisaki/> から pdf 形式のファイルとしてダウンロード可能）

Zur Behandlung des Infinitivkomplements der AcI-Konstruktionen mit Verba sentiendi und **lassen**

Yoshinori Kaisaki

Zusammenfassung

In der vorliegenden Arbeit haben wir zwei AcI-Konstruktionen des Deutschen untersucht, nämlich die mit Verba sentiendi und die mit **lassen**. Die Analyse bedient sich der kopfgesteuerten Phrasenstrukturgrammatik (HPSG).

Nach dem einführenden Abs. 1 haben wir im Abs. 2 noch einmal die in unseren letzten beiden Arbeiten vorgeschlagene Analyse der Kontroll- und der Anhebungs konstruktion referiert, sowie die ebenfalls dort vorgeschlagene lexikalische Regel, die einem Infinitiv einen nomenähnlichen Lexikoneintrag zuweist, um die für die Analyse im folgenden Abs. notwendigen Regelschemata und Prinzipien vorzubereiten.

Im Hauptabs. 3 haben wir die Analyse der AcI-Konstruktionen vorgestellt.

Im Unterabs 3.1. haben wir uns mit dem grammatischen Status von **zu** befasst. Da wir annehmen, dass sowohl bei der Kontroll- und Anhebungs konstruktion als auch bei den AcI-Konstruktionen die Infinitheit des Verbs wesentlicher ist als das Vorhandensein von **zu**, haben wir uns dafür entschieden, auch in der Analyse der AcI-Konstruktionen die für die Kontroll- und Anhebungs konstruktion vorgeschlagene lexikalische Regel anzuwenden.

Im darauf folgenden Abs. 3.2. haben wir die AcI-Konstruktion mit Verba sentiendi untersucht. Hier haben wir die Konstruktion als eine Art von Anhebungs konstruktion analysiert, weil wir der Meinung sind, dass in der AcI-Konstruktion mit Verba sentiendi — wie in der Anhebungs konstruktion — die Beziehung zwischen dem Subjekt und dem Infinitivkomplement mit Akk. eine Relation <Individuum:Situation> darstellt.

Auf der anderen Seite haben wir im folgenden Abs. 3.3. für die Unifikation der **lassen**-Konstruktion eine Vorgangsweise gewählt, die wir bei der Analyse der

Kontrollkonstruktion angewendet haben, weil wir hier meinen, dass dem Akk. in der **lassen**-Konstruktion — wie bei der Kontrollkonstruktion — vom Verb **lassen** und vom Infinitiv zwei verschiedene thematische Rollen zugewiesen werden.

Im Abs. 3.4. haben wir versucht, das vorliegende Ergebnis zu bewerten. Die in der vorliegenden Arbeit vorgeschlagene Trennung der zwei AcI-Konstruktionen wird zwar den (möglicherweise) verschiedenen Informationsstrukturen gerecht, aber es ist zuzugeben, dass in der Praxis sehr schwierig ist, für diese Trennung rein syntaktische Argumente zu finden.

Im letzten zusammenfassenden Abs. 4. haben wir einige Aufgaben für die weitere Forschung formuliert.